

気象観測センサーを活用した気象の学習～学習の場を広げ、質を高めるために～

(1) はじめに

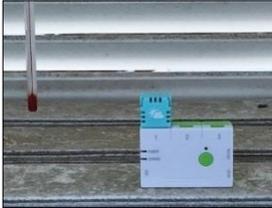
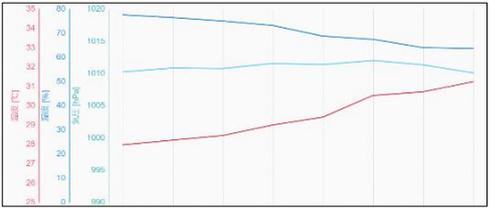
令和4年度全国学力・学習状況調査の解説資料および報告書には「気象とその変化の学習では、継続的に気象観測を行い、時間的・空間的な見方を働かせながら、気象要素と天気の変化を関連付けて捉えることが大切」とある。ICTを活用することで、計測しにくい値や最新の情報を得ることができる。これによって継続的な気象観測の機会を設け、分析・解釈する時間を充実させたりすることができると考え、同報告書を参考にしながら実践を行った。

(2) 実践①【気象観測センサーの活用】



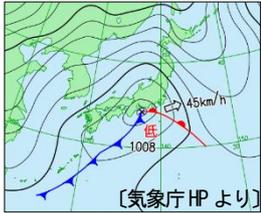
**気象観測センサーの活用**

- ・百葉箱に設置
- ・気温、湿度、気圧の連続したデータを蓄積
- ・データを即グラフ化

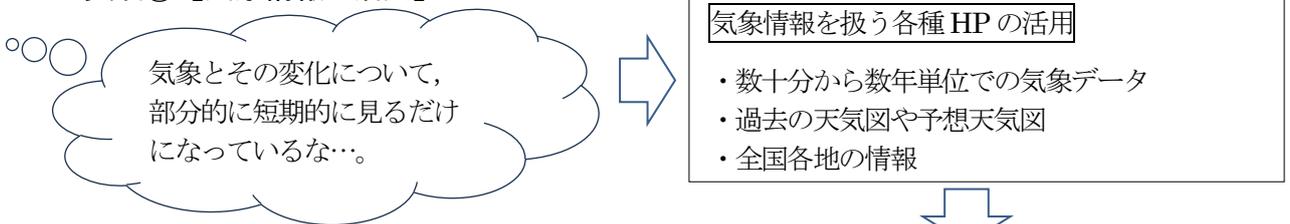
晴れ、くもりや雨など、天気によって1日の気温・湿度・気圧の変化の仕方に違いがあることを見出して理解する。

前線の通過に伴う天気の変化を、データや天気図、雲の様子と関連付けて理解する。

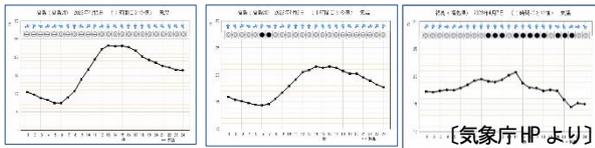



※前線の通過が予想されるときに継続してデータをとったり雲の撮影（西の空がよい）をしたりする。

実践②【気象情報の活用】



気温・湿度・気圧・風向・天気などの複数のデータをもとに、時間的・空間的な見方を働かせながら気象要素と天気の変化を関連付けて理解する。




※連続した数日間のデータをもとに、天気図を時間の経過した順に並べ替えるなどの活動が考えられる。その際、前線の通過に伴う変化が分かりやすいものや、それぞれの季節の特徴的な天気のものを選ぶようにする。